The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

〔パネル・ディスカッション　提案１〕

ライフコース研究の視野から国語教育学への期待

山　﨑　準　二

１．教育方法学研究としての「教師のライフコース研究」

「教師のライフコース研究」を教育系学会で発表し始めた20年ほど前、フロアーから「それは、教育社会学の研究ですか、あるいは教育史の研究ですか。でもあなたは教育方法学の専攻ですよね。」と、聞かれたことがある。内心、「そんなことはどうでもいいことなのに」と思いながらも、何かモゴモゴと答えた記憶が残っている。

教育方法学を専攻する者が、カリキュラムや授業を正面から研究するのではなく、それらを担って実践を営む教師を研究する意図(少なくとも私の場合)は誤解を恐れずに言うならば､次のような点にある。

第１は、万人にとって「良い授業理論」を創って提供するという幻想に近い研究を追求するのではなく、教師一人一人が個性的な「良い授業実践」を創る力量形成を支え促すような研究を追求すべきであると考えたこと、第２は、教師の力量形成を支え促すために、「かくあるべき」論から演繹された「模範的理想的な資質能力論」の提示とそれを育成するための上からの研修プログラムづくりではなく､「こうである」論から帰納していくような「教師は、教師としての力量を、いかなる場で、いかなることを契機として、いかなる具体的内容のものとして、形成していくのか」の実態分析と一人一人の発達をサポートする条件整備に携わっていくべきであると考えたこと、第３は、従来、暗黙のうちに前提としていた万人に共通で普遍的な単調右肩上がりの「垂直的」発達モデルではなく、特定の時代を生きる個性的で旧い衣を脱ぎ捨てながら変容・発達していくような「水平的・選択的」発達モデルで捉えていくべきであると考えたこと、そして第４は、発達に影響を与える経験を、「職業時間における経験」の範囲内だけで把握するのではなく､私たちの生活上の「個人時間・家族時間・歴史時間などにおける諸経験」すべてを視野に入れて、それら相互間の「共時化」を把握していくべきであると考えたことである。

２．国語教育個体史研究の延長線上にある国語教師教育研究・実践

上述のような意図に基づく「教師のライフコース研究」の立場から、次のような教師教育研究・実践の蓄積を期待したいし、学びたいと考えている。

第１は、個体史研究において強調されている「実践主体の内省」という意味内容を重く受け止めることが重要である。個体史研究が、たんに歩んできた人生を振り返って足跡を描いたり、ましてや懐かしんだりするような、いわば過去に向う回想作業ではなく、取り組んできた経験や実践を整理し、その上にたって現在時点を明確にするとともに、これから取り組むべき課題をも明確にしていくというような、いわば未来に向う自己内対話作業であると、意味づけられ、取り組まれていくことが重要なのである。

第２は、実践主体である教師が自らの経験と足跡を整理し、語り・記述すること（それを「ライフストーリー」と呼ぶ）がまず大切であるが、それを社会と教育の歴史的舞台に位置づけ、一つ一つの実践を社会と教育の歴史的展開の中で意味づけて解釈していく（実践主体者である教師と研究主体者である研究者とが共同でつくりあげる「ライフヒストリー」と呼ぶ）営みにまで昇華させていくことが重要である。そして、そのヒストリーを、個人レベルのものにとどまらせないで、なにがしかの点で同時代に生き実践するコーホート内成員教師の諸特徴を表すものにまで描いていく（「ライフコース」と呼ぶ）ことが重要なのである。

第３は、このライフコース研究自体を一つの教師教育実践であると位置づけ、積極的な教育的価値を見出し、実践していくことが重要である。例えば、教壇で一般的な国語教育実践の歴史と課題を講ずるような教師教育実践のみならず、各学習者がそれぞれ自らのライフコースを語り・描く作業を通して、自分自身の国語教育実践史を再認識し、現在の課題とこれから進み行くべき方向を見出していくことができるような機会として位置づけ、その作業を促し

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

ていくような営みが重要なのである。したがって、その営みは、年輩教師だけではなく、中堅・若手の教師、あるいは養成段階にある未来の教師たちにとってもまた、意味のある教師教育実践なのである。

3．国語教育個体史研究の延長線上にある国語教育実践研究

ライフコース研究は、さらに次のような諸点を掘り進めていくならば、従来の教育実践の水準を大きく引き上げる可能性を有しており、すでに現在、その一部は現実のものとなりつつある。

第1は、個体史研究で強調されている「実践の生成と変容を捉える」可能性を最大限切り拓いていくことが重要である。一つ一つの実践を、出来上がったものとしてではなく、創造過程、実践過程での変容、そして新たな実践への変容と再創造という、一連の過程に込められている実践主体者の願いや思いを読み取っていくこと、さらには「実践の生成と変容」を社会と教育の歴史舞台の上に位置づけ、歴史舞台を逆照射するとともに、実践の意味を読み取っていくことが重要なのである。（この点については、久冨善之編『教員文化の日本的特性』（多賀出版、2003年2月）において「戦後日本の教育実践と教員文化：鈴木正気のライフヒストリー」で試みた）

第2は、実践主体が語る「経験の自覚史」から、実践主体が有する「実践知の形成史」にまで迫ろうと追究していくことが重要である。筆者自身の研究は、未だ「発達と力量形成の姿」を大きく描くと言うマクロな観点からの描写にとどまっているが、実践者が自らの実践上の「ゆきづまり」感やライフコース上の転機を語る言葉（例えば「この子らの声が自分に聞こえてこない、自分の声もまったく彼らに届いていかない」や「押すだけではなく、引くことを覚えた」など）に着目し、それらの言葉の意味内容を、それが発せられた具体的状況・文脈の中で理解することによって、ミクロな観点からの「専門的力量の内実」を析出していくことが重要なのである。（この点については、科研費報告書『教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ：授業スタイルに関わる教師の実践的知識を中心に』（代表・森脇健夫、2004年3月）における松崎正治・藤原顕、森脇健夫・岩崎紀子の各報告が参考となろう。）

以上、いずれにしても、上述のレベルまで引き上げるためには、例えば、インタビュー調査の場面に限って言うにしても、インタビュー技術等に関する能力の有無が問題なのではなく、実践家から発せられる本質を象徴的に語る表現に瞬時に気づき、その意味内容を引き出すような問いを発しながら、読み解いていくことができるような能力の高低が決定的に問題となってくるである。

4．論点

報告の後、シンポジスト相互の、及びフロアーからの質問・意見を受けて論議された諸点について、以下では、教科教育学の存在意義に関する問題のみに絞って筆者の考えを整理しておきたい。

本シンポが設定された背景に同問題をめぐっての激しい論議があったようであるが、筆者自身は教科教育学固有の存在意義と重要性を強く認識している者の一人である。一般教授学（教育方法学）研究者を志向する者も、何か一つの教科・領域に即し・こだわりながら研究作業に携わる必要があると思うし、またそうしなければ理論そのものが宙に浮いたものになってしまう。筆者自身は、社会科・社会認識の教育を念頭に置きながらものを考えているし、同教科・領域の教科教育学研究者としても恥ずかしくない発言ができるようにと思い続けてきた。しかし、ライフコース研究の一環として、実践家にインタビューを行うことが多くなるにつれて、上記「3」の「実践家から発せられる本質を象徴的に語る表現に瞬時に気づき、その意味内容を引き出すような問いを発しながら、読み解いていく」作業がより本質に迫っていくにつれ、対応する教科・領域の教科教育学研究者の力が必要であると痛感してきている。授業研究がさまざまな学問領域の研究者がそれぞれの固有な視点をもちながら共同作業していくに値する・いかねばならない総合的性格を有しているものであり、その多様な学問領域の研究者の多様な視点を授業の事実に即して絡み合わせていく役割を負う存在として教科教育学研究者が必要である。同様に、教育実践研究としての「教師のライフコース研究」を掘り進めようとするためにも対応する教科教育学の研究者の力（蓄積してきた研究成果と実践を捉える眼力）がどうしても必要となるのである。以上

※拙著『教師のライフコース研究』（創風社、2002）、及び拙編著『教師としての仕事・生き方』（日本標準、2005）を合わせて参照願えれば幸いです。

（静岡大学）

NII-Electronic Library Service